祭 REDISCOVERY

蓮華会蛙飛び〈金峯山寺（奈良県）〉

奈良県吉野山金峯山寺（きんぷせんじ）の蓮華会（れんげえ）は、毎年7月7日（古くは6月9日）早朝に、役行者が産湯をつかったと伝えられている、大和高田市奥田の蓮池の蓮取り行事から始まります。吉野山一山の僧侶が蓮を迎え、金峯山寺の蔵王堂にその蓮を供えます。翌8日には、大峯奥駈道の道沿いの拝所に蓮を供えながら、山上ケ岳・大峯山寺まで蓮を持ち運び供えます。これは山の神に花を供える古くからの山への信仰といわれています。

この蓮華会では、蔵王堂にて献花の後、蛙を人間に変える「蛙飛び」の儀式が行われます。寺伝には、白河天皇の延久年間（1069～1074年）の頃、男が金峯山に登り、蔵王権現や修験者に暴言を言いました。すると大鷲が飛んできて、男はさらわれて断崖絶壁の上に置き去りにされました。断崖絶壁から降りることができず、さすがに男は改心したところ、金峯山の高僧の法力により蛙の姿に変えられて救われ、蔵王堂に連れて帰られました。その後男は蔵王権現の前で修法をして、人間の姿に戻されたと伝えられています。

金峯山寺の蔵王堂は、高さ34m、巾36m、木造建築としては東大寺の大仏殿に続く大きさです。この行事の主人公である蛙は、人間が青い蛙のぬいぐるみを着たもので、蔵王堂の仏前にかしこまって修法をするその動きはたいへんユーモラスで微笑ましいものですが、蛙は吉野山の地霊を示す動物だと信じられており、また、蛙が山伏たちの読経の功徳と導師の受戒を授かって、めでたく元の人間の姿にかえる儀礼は、修験者の護法の能力を競う験競べと解されています。奈良県の無形民俗文化財に指定されているこの祭は、奈良盆地の奥田の蓮池から吉野山を経て大峯山上ケ岳までの広がりをもつスケールの大きな祭礼です。

那智の火祭り〈熊野那智大社（和歌山県）〉

「熊野」という地名は「隈の処」という語源から発しているといわれており、奥深い処、神秘の漂う処ということになります。また「クマ」は「カミ」と同じ語で、「神の野」に通じる地名ということにもなります。

熊野那智大社の社伝には、「神武天皇が熊野灘から那智の海岸“にしきうら”に御上陸されたとき、那智の山に光が輝くのをみて、この大瀧をさぐり当てられ、神としてお祀りになり、その御守護のもとは、八咫烏の導きによって無事大和へお入りになった」と記録されています。それ以前から、那智山一帯は瀧に対する自然信仰の聖地であり、熊野那智大社の社殿が、ほど近く、見晴らしの良い現在地にうつされた後も、那智の瀧は飛瀧神社の御神体として厚く信仰されています。

那智の火祭りは熊野那智大社の例大祭で、正式には「扇祭」あるいは「扇会式」と呼ばれます。毎年7月14日に執行されますが、古くは6月14日・18日の両日執り行われていました。和歌山県の無形民俗文化財に指定されており、熊野那智大社に祀られている瀧の神が、年に一度御瀧前の飛瀧神社へ里帰りを行うものです。十二体の熊野の神々を御瀧の姿を表した高さ6mの十二体の扇神輿にうつし、熊野那智大社から御瀧へ渡御します。那智の火祭りと呼ばれる御火行事は、那智の瀧の参道で行われ、十二体の扇神輿を重さ50kg以上もある大松明でお迎えし、その炎で清める神事です。

7月9日に社殿が清められ、那智の瀧の注連縄が張り替えられます。11日に扇神輿十二体が組み立てられて、13日には宵宮祭が行われます。当日は、午前中に那智大社境内にて、大和舞や田植舞、そして国の重要無形民俗文化財に指定されている田楽舞（那智田楽）等が奉納され、午後から扇神輿が大社から旧参道を経て御瀧前の飛瀧神社に運ばれます。燃えさかる大松明と扇神輿が参道の石段上で合流すると、祭は一気にクライマックスを迎え、まさに勇壮の一言です。

文：ＯＤＡ広報委員会　イラスト：大和田　昌